

感謝の日常生活

此等が當時の家庭の行事であつた。質素勤勉そのものゝ様である。何事にも勞苦を厭はず喜んでせつせと働くといふ杉家の美風がよく顯はれてゐる。何時も野良仕事には一家總出で、親も子も兄弟も時には親戚のものも相携へて常に田園に土と親んでゐる。田植もすれば畑も作る。麥も蒔けば野菜も作る。蕎麥も大豆も猿豆も作る。副業には桐や茶や麻や藍までも栽培する。米搗きもすれば木割りもする。それに夏の炎天には梅太郎や寅次郎等をつれて、後の山にしば刈に出かけ、また山畑の草取りもする。霜の朝には藎を採りつゝ、一面には子供等の筋骨錬磨に資し浩然の氣をも養はしめる。冬の夜は爐邊に繩をない草履を作り藁細工までもする。母の瀧子は炊事に洗濯に風呂たきは勿論、彼等の側で糸を紡ぎ針仕事などをする。そして感謝の其の日々をいとも愉快に送つたのである。而かもこの間に於て『大照院の藩主の墓参りをなし、或は登城先祖御祭禮』とまで記してゐる。加之親戚の訪問や町への買物などは大概夜中に用を達する。朝から晩まで働いて働き通してゐる辛棒振りである。後年久坂義助(と瑞)がその働き振りをみて

『古い書物に勉強家のことは随分形容して書いてあるが、杉の老人ほどの勤勉家は實際に見たことがない。』

と云つて驚いてゐた程であつた。

夫百合之助の平常

内容見本

(原寸)

松陰一族 幕末萩の質素な日常は
生活史・女性史研究の宝庫

福本義老著

高田松陰の母



マツノ書店

四女・久坂文子

松陰先生の末の妹が文子であつて、その容貌は松陰先生の畫像そのまゝであると云はれてゐる。瀧子にとつては一番末の女の子だけに餘程可愛かつたやうである。この文子の嫁したのが久坂玄瑞である。

久坂玄瑞は、松陰先生の門人であつて、先生も『防長第一流の人物』とまで賞讃されてゐる程の有爲な青年であつた。松下村塾の參謀長格であつて、學問識見共に衆に擢んで高杉晋作と併び稱されてゐたが、人格的衆望に至つてははるかに高杉の上であつた。松陰先生の歿後、村塾の同志とは勿論當時の勤皇志士とも互ひに心を通じ、興朝倒幕のために東奔西走、殆んど席の温まることがなかつた。

文子が玄瑞に嫁したのは、安政四年十二月で、玄瑞は十八歳、文子は十五歳であつた。當時久坂の盟友口羽柵山がこの結婚を喜び、また杉家の家風をたゞへて『久坂もこれよりはほんとは捨身の活動が出来ることであらう』と、心から悦びの祝言を呈してゐる。松陰先生もまた『妹がこの上もない好配偶者を得たことは、吾等の幸福である』と喜んでゐられるほど

杉家の人々

六三

杉家の人々

六四

の双美の結婚であつた。

この幸福にみちた若い人生の行路も、足掛け八ヶ年の家庭生活で早くも哀しい終焉を告げたのである。それは、玄瑞が元治元年七月十九日蛤御門の戦に鷹司邸に於て自刃したからである。その八年間も、實際は玄瑞が勤皇活躍のために多くは江戸や京師に往來してゐて、郷里萩にあつて文子と親しく家庭らしい生活を營んだのは僅に二年足らずの間であつた。久坂家もあまり裕福な方ではなかつたから自然文子も杉家に寄寓し、時たま玄瑞が歸萩しても大抵は杉家に文子と共に同居すると云つた有様であつた。この間にあつて、母の瀧子も定めし何かと世話に心を砕いたことであらう。

玄瑞が廿五歳を一期として、あたらしい有爲の大志を抱きながら、護國の鬼神と化したので、文子は、廿二歳のうら若き身をもつて孤獨の寡婦となり、まことに哀れな運命に逢つたのである。その後は、老父母の膝下にあつて、亡き夫の英靈を弔ひつゝ、まことにあじきない歳月を送つてゐた。一時は召されて藩公の幼君(後の毛利元昭公)の傅役となり名も美和と改めた。然るに、明治十四年たま／＼揖取素彦に嫁してゐた姉の希子(壽子)が亡くなつて、次第に老境に向ふ素彦と二人の遺子とが、淋しくもそのあとに残されてゐたので、實家の母の瀧子は孫達の不

■体 裁 A5版二六六頁 並製箱入
 ■特 価 四千元(税・送料)
 ■定 価 五千元(税別)
 ■特価締切 四月十日
 ■発 売 二十六年五月中旬
 ▼書店不卸 ▼返本OK
 山口県周南市銀座2-13
 ☎0834-2195
マツノ書店



『吉田松陰の母』と福本義亮

萩博物館特別学芸員 一坂太郎

萩出身の椿水福本義亮（一八八七～一九六二）は神戸を拠点に活躍した実業家だが、こんにち私たちがその名を聞くことがあるとすれば、「吉田松陰研究家」としての実績が残っているからであろう。戦前戦後を通じて、二十冊あまりの松陰関係の著作を世に送り出しているが、いずれも労作で、今後再評価されるべきだと思ふ。

今回マツノ書店から復刻される『吉田松陰の母』はそのひとつだ。奥付を見ると昭和十六年（一九四一）七月二十五日印刷、同年八月五日、第一刷発行となっている。発行は東京の株式会社誠文堂で、同社は他にも『吉田松陰の殉国教育』『吉田松陰 孫子評註』『至誠尽忠 吉田松陰の最後』『訓註 吉田松陰殉国詩歌集』『吉田松陰の大陸南進論』『下田に於ける吉田松陰』『吉田松陰の愛国教育』といった福本の著作を出した。福本には他に自費出版らしき出版物もあり、さらに未刊原稿もかなりの分量が残っていると聞くから驚きだ。多忙だったはずの本業の合間に、どうすればこれ程の質量ともに充実した仕事が出来たのか、不思議である。

福本の松陰研究の魅力は、狂おしいまでの松陰に対する敬慕の念が、どの頁からも迸ってくるという一点にあると思う。それが、異様な迫力で伝わり、読む者の胸を打つ。松陰を探究するためならば全財産、生命まで賭けても惜しくないといった、常軌を逸した情熱である。学界であろうが在野であろうが、それが感じられない研究者など、私は絶対に信じない。

さて、『吉田松陰の母』であるが、書名のとおり、松陰の実母滝子（タキ）を中心に書かれた一冊だ。どのような母親、どのような家庭環境から「松陰」という人物が生まれたのがテーマである。

まず、滝子が嫁いだ杉家のつましい暮らしぶり、夫百合之助の人物像、家風、教育などが紹介される。

つぎに「杉家の人々」の題のもと、「夫の次弟・吉田賢良」「夫の末弟・玉本文之進」「長男・杉修道」「次男・吉田松陰」「三男・杉敏三郎」「長女・児

「独逸ヒトラー総統が

『母は余が国家の支柱なり。』

と絶叫し、また

『独逸の少女たちよ、諸君は独逸の母となることを記憶せよ。』と、少女に教へ、母性に期待したといふので、日本の婦女子もかくあらねばならぬと日本国中すべての人々が喧ましくはやしたて、ゐる」

といった調子だ。こうした時代を色濃く反映した記述も多々あり、知らずに読むとびっくりされるかも知れない。

あるいは「胎教の尊さ」の一章中に「現代婦人への希望」の一項があったりすると見ると、福本は世の若い母親や妊婦を読者に想定して、この本を書き進めたようである。

私はこのようにきな臭く、押し付けがましい部分はまったく使えないと以前は思っていたが、最近少し考えを変えた。つまり、七十年前の戦時下日本で理想とされた女性像、母親像がどのようなものだったのかを知る「史料」として、有益ではないかと考えるようになったのだ。「幕末」「松陰」に直接関心はなくても、たとえば「女性史」や「昭和史」などの研究者にもお勧め出来るような気がしている。

最後に福本に敬意を表しつつ、本書を補う意味で、本書には触れられていない史料に注目しておこう。昭和十五年に出た『吉田松陰全集』十二巻の「補遺」に収められている松陰著「石本亀齡君墓碑銘」だ。石本亀齡は姫路藩の四百石どりの武士で、松陰とはおそらく面識も接点も無い。なぜ、そのような人物の墓碑銘を松陰が書いたのか。

安政二年（一八五五）十月二日、五十歳の亀齡は江戸の上屋敷で「安政の大地震（マグニチュード）」に遭遇する。最初は助かった亀齡だったが、炎上する建物の中に老母がいると知る。そして「寧ろ独り生きんよりは、生くるなきに若かず」と、建物の中にわざわざ飛び込んで、母と一緒に死んだのだという。

当時萩で謹慎中だった松陰はこの話を聞き、そ

の列伝となる。このあたり、人名事典としても重宝するだろう。

さらに松陰と母との情愛、家族の絆を示すさまざまなエピソードが羅列される。多くは史料から抽出したものだ、中には著者福本が地元出身の強味を活かし、類書にないようなものも集めており貴重だ。松陰が江戸で処刑される直前、

「親思ふこゝろにまさる親心

けふの音づれ何ときくらん」

と歌った意味も、さらに深く理解出来よう。また、松陰が処刑された時刻、郷里の父母が松陰の夢を見たという話も、こうした親子の絆があれば自然なことに思えてくる。百数十年前の長州萩に実在した家族の軌跡をたどっていると、親子とか家族の絆についていま一度考えてみたくなる。

戦時中の「忠君愛国」の精神をベースに書かれた史書というのは、読み方にある種のコツがあり、何が必要で何が不要かを分別する嗅覚が求められる。この本も真珠湾攻撃の半年ほど前に出たことに、注意して読まねばならない。なにしろ「はしがき」の頭から、

称える文章を作り、墓碑に刻んで欲しいと遺族に送りつける。このあたり、いかにも純粹な松陰らしくて微笑ましい。しかしさすがに遺族は見知らぬ萩の若者から送られて来た文章を、その時は墓に刻まなかった。

火中に身を投じた時の亀齢の心中を思い、松陰は「他人より之れを觀れば、則ち奇禍なれども、君（亀齢）に於ては則ちの味と為す」と述べる。

「菊寮」とは、牛馬が草を食べること。つまり五十歳の亀齢が、わざわざ母親と一緒に死ぬ道を選び、美味しい料理でも食べているかのごとく、うっとりとしながら焼け死んでゆく様子を、松陰は想像して共感の涙を流すのだ。おそらく松陰も亀齢と同じ場面に立ったら、同じ行動をとっていたのであろう。これは孔子の説く孝行とも違う。松陰にとり、母親とはそのような存在であった。

すべての男は「マザコン」であり、すべての母親にとって息子はいくつになっても「アイドル」である。松陰もその母もまた、例外ではないことが分かり、なんとなく嬉しい気分がした。

目次

九重の聖恩に感泣す

照憲皇太后の御仁愛

瀧子 聖恩に感泣す

杉瀧子とはどんな女性か

瀧子杉家に嫁す

杉家とその他々々

樹々亭の新家庭

瀧子の里親・村田右中

瀧子入嫁後の杉家の家庭

夫百合之助の平常

杉家の新しき推進力

杉家の勸農日記

感謝の日常生活

松陰先生の勸農思想

思ひ出多き樹々亭山屋敷

八谷聴雨の山莊

松陰先生の追憶

杉家の山屋敷樹々亭

胎教の尊さ

杉家をめぐる雰囲気

樹々亭の風光と魂への影響

現代婦人への希望

脈々と打ち込む勤皇思想

瀧子の夫杉百合之介

烈々たる家庭教育

嚴父の指導と慈母の愛育

伝統的杉家の家風

読書家の祖父杉七兵衛

半土半農の生活

勸農教育唯一の補助者

その日その日の山屋敷

静かな楽しい生活

兄妹の親睦と母の愛情

家を取締る瀧子の訓育

家庭に於ける瀧子の心使ひ

家庭の主婦としての心労

夫百合之助の理解と同情

瀧子夫婦と子供達の生活

貧苦の中に養はれた殉国精神

尊き母性の慈愛

厳しい父の心と優しい母の心

杉家で催された因会

杉家の人々

夫の次弟・吉田賢良

夫の末弟・玉木文之進

長男・杉修道

次男・吉田松陰

三男・杉敏三郎

長女・児玉千代子

次女・小田村壽子

四女・久坂文子

母としての瀧子の心労

一家の勤皇精神を培養する

高洲と合住居の心尽し

清水口の高洲の宅

清水口時代の杉家の生活

旅の松陰先生と母子の情愛

受難の松陰先生と瀧子の心痛

結び合ふ母と子の心情

獄中の松陰を労ふ

松陰先生の米糶塔乗事件

毅然として児を励ます父母

尊攘殉國児への母の感化力

獄中の松陰先生と家庭の人々

獄中から妹への手紙

子女の精神を培ふ母の薫育

松陰先生の兄弟愛

獄中の松陰先生と母の心尽し

松下村塾の母瀧子

松下村塾の由来に就いて

寄宿生への心尽し

品川弥二郎の塩茶漬

梅田雲濱への款待

有合せものの誓心

煎豆・番茶にこうせん一杯

米つき台の勉強

汚れ物の洗濯

柿や蜜柑の開放

村塾の増築

塾における女兒の教育

母性愛に寅次郎は泣く

松陰先生再び野山獄へ入らる

先生獄中に絶食を決意する

母性愛に溢るる瀧子の手紙

諄々と説く夫百合之助の手紙

玉木叔父の厳然なる警告状

明けやすき最後の一夜

五月雨の獄中、悲涙愁傷

松陰先生獄を出て実家に帰へらる

この母にしてこの児あり

松陰先生江戸への護送

親思ふ心にまさる親ごころ

夢路に通ふ慈母の心

嗚呼悲哉松陰先生の最後

愛児を思ふ瀧子の心情

一家一門の悲運

松陰先生刑死後の杉家の人々

瀧子の尊き精神と不動の面影

雄々しき節婦烈女の龜鑑

前原一誠の乱と瀧子の態度

乱に処して一糸乱さぬ沈着心

静謐なる瀧子の晩年

宏大無辺の聖恩愛児の枯骨に及ぶ

念佛唱名往生楽土の佛光に浴す

日本女性として永遠に輝く精神